

上代における不連濁語の周辺

森山, 隆
九州大学教養部 : 助教授

<https://doi.org/10.15017/6796106>

出版情報 : 言語科学. 3, pp. 15-24, 1967-03. 九州大学教養部言語研究会
バージョン :
権利関係 :



上代における不連濁語の周辺

森 山 隆

〔 1 〕

上代における連濁現象について、これまで二・三の有力な解釈が提起されている。就中、村山七郎氏は「連濁について」（言語研究 26-27 号，昭 29・12）の中で、戦前の金田一京助（国語音韻論，154 頁）・菊沢秀生（国語音韻論，74 - 75 頁）両氏の、環境による同化説ともいふべき、有声音による無声音の類化の説、および小倉進平氏によつて紹介された B.S. Lyman の、有声子音の脱落によると仮定した有声化影響説（小倉進平「国語及朝鮮語のため」291 頁），の両説を紹介批判し、これらの説がみな暗々のうちに連濁を派生的現象と考へてゐることを鋭く指摘した。

同化説によると、tani-kawa（谷川）といふ結合状態がいよいよ緊密の度をますと、[k] が前後に有声音を受けてゐるため [g] になり、tani-gawa となる、と言ふ。また、有声化影響説では kötö-nö-fa（言の葉），fi-ni-fi-ni（日に日に）の nö（の），ni（に）が nö > n，ni > n 化することによつて kötö-n-ba > kötöba（言葉），fi-n-bi-ni > fibini（日日に）の形をとる、と言ふ。

この両説に従へば、村山氏の指摘する如く、連濁現象の現出する頃の日本語には語頭に濁音を持つ語は無かつたと類推できる。（周知の如く、上代においても擬声語的「鼻毗之毗之（鼻びしびし・方・5・892）」の語以外に語頭濁音の例は見えない）。

これに対し、村山氏は「連濁は、日本語において、有声～半有声音子が語頭に立ち得た時代の名残り」と解し得る（同上論文 107 頁）として、「くは（美）<*gupa」「くつ（沓）<*gutu」「ここだ（幾許）<*gəgə-da」「こと（同，如）<*gətə」「こゑ（声）<*gebē」「こと（事）<*gətə」「け（異）<*gē」などの語の祖形が朝鮮語，満洲文語，ツングース語，蒙古語などの中にそれぞれ比定し得る語形を持つことを指摘し、その解釈の可能性を説かれた。

これらの説は、いづれも現在の研究の段階では傾聴すべき一面を含んでゐると言へる。といふのは、金田一・菊沢・B.S. Lyman の各説と同様、村山説もまたおのづからそこに限界が存するからである。村山説を拡張解釈して、上代の連濁語形がなんらかの意味で祖形を反映してゐると仮定した場合、カサタハ各行を語頭に持つ語は 4～5 語を除きすべて上代で

は連濁形を有するので、逆に、上代以前のある時期の日本語はカサタハ各行を語頭に持つ語は数語を除いてほとんど存在しないことにならう。そしてガザダバ各行を語頭に持つ語の無声化によつて、上代のカサタハ各行を語頭に持つ語が現出するやうになつた、と見なければならなくなる。

したがつて、村山氏も上述の推定に際して、類推によつて成立した連濁形、または祖形を示さない連濁形の有ることを指摘される。その類推がどのやうにして行はれたかについては委しい説明が無い。

連濁現象の究明は上述の各説を検討しても解るやうにかなり複雑な様相を帯びること必至である。その解明の一環として、かつて「連濁 一上代語における 一」（語文研究14号、昭37-2）と題して上代における連濁現象を整理し、その実態を明らかにすることに資した。以下、本稿においては上記論文においても触れた不連濁語の存在について、それに付随する問題を明らかにしたいと思ふ。

〔 2 〕

記紀万葉を中心とする上代の万葉仮名書きの資料の範囲で、さしあつて次のやうな事実が指摘できる。

(A) 上接語の如何を問はず、常に不連濁の語。

カシ (榎) キ (木) クニ (国) シホ (潮) シマ (島) ヒ (日)
フ (生・原)

(B) 上接語の如何によらず、常に連濁する語。

カタ (瀉) キリ (縷) フスマ (衾) クハン (美) トヒ (問・訪)
ツタヒ (フ) (伝) ヒキ (ク) (引)

(C) 必ず連濁表記される、ある特定の連接語。(約90語)

ヤヘ賀キ (八重垣) カ具ハン (細) モモ豆タフ (百伝) etc. (上記拙稿参照)

これらの事実は、現存する限られた資料に見える範囲内での整理であるので、直ちに上代語の全般を推すわけに行かないにしても、上代語の投影として考へればかなり信頼のおける特徴的事実であるかと思はれる。(B)に属する例は別稿に論ずることとし、また(C)の事例については先掲論文にその大要を論じたので、以下(A)の事例を挙げて検討しよう。

(A)に属する語の全用例。(カタカナは音仮名、ひらがなは訓仮名を示す)

(イ) カシ (榎)

イツ加シ (記92) いつ可シ (万9) クマ加シ (記39, 91)

シラ伽シ (紀 23)

(ロ) キ (木)

イチサカ幾 (紀 7) *イハ紀 (万 800) *クサ奇 (万 4314) シタ紀 (記 47)
ソメ紀 (記 4) フユ紀 (記 47) (* は 参考のため挙げる)。

(ハ) ク = (国)

カラ樺 = (紀 99) カラ俱 = (紀 100, 101) カラ久 = (万 813, 3627)
カラ久ニノ (万 3695) ハコ矩 = (神代紀上・訓注) ヒト久 = (万 3748 3749)
ホツマ勾 = (神武紀・訓注) ヤソ久 = (万 4329) ヤシマ久 = (記 2)
ヤシマ俱 = (紀 96)

(ニ) シホ (潮)

アサ之ホ (万 4396) ウ之ホ (紀 120) ウズ之ホ (万 3638) ウラ之ホ (万
3707) ミカ始ホ (紀 45) ユフ之ホ (万 4360, 4398) ユフ思ホ (万 4331)

(ホ) シマ (島)

アキヅ志マ (記 97) アキヅ辞マ (紀 62, 63) アキヅ斯マ (紀 75, 75)
アキヅ之マ (万 4465) アヅキ辞マ (紀 40) アハ志マ (記 53) アハ之マ
(万 3631) アハ之マノ (万 3635) アハチ辞マ (紀 40) アハチ之マ (万
3720) イチヂ志マ (記 42) イハヒ之マ (万 3636, 3637) イヘ之マ (万
3627, 3718) オノゴロ志マ (記 53) オホ之マ (万 3634) サケツ志マ
(記 53) シキ志マノ (万 4466) タマ志マ (万 854, 862) ミ志マ (記
42) モモヅ思マ (万 3367) ヤスマク = (記 2) ヤソ之マ (万 3651)
ヤソ志マ (万 4349) ヤソ之マガクリ (万 3613) ヤマト思マ (万 3608,
3648) ヤマト之マネ (万 4487)

(ヘ) ヒ (日)

アサ比 (記 3, 100) アサ比サシ (万 4003) イカシ比 (皇極紀・訓注)
イリ比 (万 15) ウチ比サス (万 886, 4473) ウチ比サツ (万 3505)
ツク比 (万 4378) ハル比 (万 818, 4020) ハル卑 (万 846) ハル比 (紀
94) ハル比ノ (紀 96) ヒト比 (万 3604) ユフ比 (記 100)

(ト) フ (生・原)

アハ布 (記 11) アハ赴 (紀 13) ハ = 布 (記 76) はに布 (万 69)
= 布 (万 3560, 1173) ムグラ布 (万 759)

上記の連接事例の中で「イハ紀」「クサ奇」はそれぞれ「岩や木」「草や木」の意であるの

で、そこに連濁現象を予想できないが、「ヤングニ」「ヒトグニ」「イハヒジマ」など寛永版本に連濁して訓む如く、その他はいづれも連濁の可能性のある接続事例である。しかしながら、上記の語に関する限り、上代に連濁の事例が見えぬ場合は、一步を進めて、おそらく訓仮名表記の場合にも然るべく推し及ぼし得る可能性があるだらう。少なくとも消極的な意味において、連濁して訓むよりも可能性に富むであらう。以下に万葉集に見える上記関係語の訓仮名表記の例を挙げる。

(イ) 白牝牾 (万10・2315)

これをシラカシと清んで訓むのに異存はないであらう。

- (ロ) 阿白木 (3・264) 埋木*(7・1385) 埋木之*(11・2723) ウエ木 (20・4495)
殖木 (3・310, 19・4207) 神樹 (4・517) 黒木 (4・779, 8・1637, 1638) 黒樹
(4・780) 賢木 (3・379) 禁樹 (1・45) 燎木**(7・1403) 多伎木**(14・
3433) 爪木 (7・1203) 野木 (10・2339) 久木 (6・925, 10・1863) 浜久木*
(11・2753) 若歴木*(12・3127) 船木*(3・391, 17・4026) 船材*(3・391)
蹋木*(10・2062) 冬木 (8・1645, 1646) 宮材*(11・2645) 造木**(2・90)
百木 (17・3906) 百樹 (6・1053) 若木 (4・792) 若樹 (8・1423)

これらの語の中で、*印を付したものは、佐竹・木下・小島三氏共編萬葉集で濁音に訓み、岩波古典文学大系萬葉集で清音に訓む語である。**印は両者ともに濁音で訓む。

「久木」は大日本古文書に「比佐宜染」(大日本古文書I・554 P, 天平六年造物所作物帳)とあつて、その実を染料に使つたと思はれるのでヒサギと濁音で訓めるだらう。ただ、木の名の中で語尾に「一キ(乙)」を有するのは<木>の意であると即断する説もあるが、それが一語化した形としても必ずしも濁音であるとは限らない。

(清) サカキ, ツキ, マキ, ムキ, (cf. ツバキ(甲) ヤマブキ(甲), (草名) アシツキ(甲) ススキ(甲))

(濁) スギ, ヤナギ, オギ, ヒサギ, (cf. (草名) ウハギ, ハギ, ヨモギ, ヲギ, ムギ(甲))

「埋木(ウモレ木)」や「多伎木(タキ木)」の類がどの程度熟合し、それに伴つて濁音化する傾向にあつたかは、さしあつて確証とすべきものが無い。また「爪木(つま木)」「船木(ふな木)」「宮材(みや木)」などが連濁し、「神樹(カム木)」「禁樹(さへ木)」「若木(わか木)」を不連濁とする説も一説とする以上に認め得べくもなからう。したがつて、「木」の接続の場合はまづ不連濁に訓むのが一般であると思はれる。

(ハ) 八島国 (万6・1065)

仮名書きの例に従つて「ヤシマクニ」と訓める。

(ニ) シホ (潮) ……万葉集に訓仮名表記の連接事例が無い。

(ホ) 笠島 (12・3192) 梶島 (9・1729) 神島 (15・3599) 借島 (6・1024) 子島 (1
・12 或) 児島 (6・967, 8・1454) 小島 (7・1401, 9・1711, 11・2753) 小島神
(7・1310) 狛島 (15・3681 詞) 小竹島 (7・1236) 酢蛾島 (11・2727)
高島 (3・275, 7・1171, 1172, 9・1690, 1718, 1734) 竹島 (7・1238) 栲島 (7・1233)
角島 (16・3871) 鳴島 (12・3164) 奴島 (3・249) 野島 (1・12, 6・933, 934,
942) 野島ガサキ (15・3606, 3・250, 251) 姫島 (2・228) 水島 (3・245, 246)
蓑島 (5・814 注) 八島 (6・1050) 八島国 (6・1065)

これらは、おそらくすべて不連濁の形で訓むべきものであらう。「野島」の例を岩波古典大系萬葉集では連濁して訓むが(三氏共編萬葉集はすべて不連濁の形で訓む)、地名化した他の複合語「一島」が仮名書きの例を見ても清音を保持しているの、この場合も「ノシマ」と訓むところと思はれる。

(ヘ) 朝月日 (7・1294, 11・2500) アサ日 (14・3407) 朝日 (2・177, 192, 12・3042, 13・
3234) 朝鳥 (10・1844) 旦日 (2・189) 朝日影 (4・495) 月日 (4・510 他
7 例) 長日 (12・3150) 春日ヲ (3・372) 一日 (2・186 他 12 例) 夕附日
(16・3820) 夕日 (7・1342) 暮日 (12・3001, 13・3234)

(ト) 茅生 (12・3057) 葦原 (11・2687) 麻原 (12・3049)

これらの訓仮名表記も、おそらくすべて不連濁に訓めるところであらう。

上掲(1)(4)(7)(9)(11)(14)の例を検討しても、音仮名表記の例に平行して不連濁に訓んでも、重大な障害となるべき事例は見当たらない。「木・国・島・日」などの語は基本的な名詞であるので、これらが用例の存する限り、常に不連濁であつたといふことは重要な現象であると言はねばならない。

第一に、連濁が単に音声(韻)の環境による変化とする説は、村山氏も指摘された如く、直接の解明とはならないであらう。たとへば「シマ(島)」「クニ(国)」のやうに鼻子音を持つ語は、

タマシマ(玉島) ミシマ(美島) ヤシマクニ(八島国) ホツマクニ(秀真国)

のやうな環境では容易に濁音化しさうであるが、常に不連濁である。これに対し「キリ(霧)」「カタ(瀉)」などの語は常に連濁形である。(上記拙稿参照)。

ナニ我々(難波瀉) マツラ我々(松浦瀉) アサ疑リ(朝霧) ユフ義リ(夕霧)

このことは、少なくとも上代においては、連濁現象が音声(韻)環境の条件以上に、語単

位の問題であつたことを意味してみよう。もつとも金田一氏とて「用みられること度重なるにつれ、いよいよ結合が緊密に」（国語音韻論154頁）なることを前提とされてゐるので、単に音声環境の面のみを重視されたのではないことは明らかである。

第二に、不連濁語の存在は、直接には村山説にかかはり合はない。しかし、氏が連濁現象を、語頭に濁子音が立ち得た名残り、と意義づけされ、また類推による連濁も有り得たとされたことに対し、上代の連濁現象はそれに留まらないことを提言し得る意義を持つ。以下、それについて述べてみよう。

[3]

連濁現象の多くは、二語連接すなはち「修飾語+被修飾語」の関係において、被修飾語の語頭が濁音化することである。図示すれば（○は清音節、●は濁音節を表す） ○○+○○ → ○○●○ となる形である。しかして、上代語の清濁音節の分布は、

- 一音節語 ○
 二音節語 ○○, ○●
 三音節語 ○○○, ○○●, ○●○

といふ形であつて、濁音節は語頭に立たず、第二音節以下に現はれる。したがつて、二音節語同士が連接の結果、もし ○○-○○ の形に留まらず、○○-●○ の形に移行したとすれば、後接語●○の形は一語としての独立した存在より、●の濁音節の機能によつて○○●○なる四音節語の第三・四音節を意味するに近い形となるだらう。したがつて連濁形○○●○は単に ○○-○○ の二語の連接しただけの意味でなく、複合語化、一語化の途上にあるといへる。もつとも、逆に連接の際に濁音節が存在しないからといつて、その結合が複合的、一語的でない、とは主張できない。それは不連濁語が存在するからである。不連濁語を含む連接語が連濁した接続語より、結合度において緊密さを欠くとは言へないからである。

ただ、注意すべきは上代の連濁現象の中にも、同語を連接して連濁化を起した事例が存することである。これは何を意味するのであらうか。まづ、以下にその事例を掲げる。

(イ) カガ(日日)記26

迦賀並べて 夜には九夜 日には十日を(記26)

(ロ) クニグニ(国国)万20・4381,4391

久ニ具ニの 防人集ひ 船乗りて別かるを見れば いともすべなし(万20・4391)

久ニ具ニの やしろの神にぬさ祭り あが恋ひすなむ 妹がかなしさ

(万20・4391)

(ハ) クマグマ (隈隈) 紀56

…寄るましじき 川の区マ愚マ 寄ろほひ行くかも うらぐはの木 (紀56)

(ニ) コチゴチ (此方此方) 記91, 万3・319, 万9・1749, 万2・210, 213。

…槻の木の 己チ碁チの枝の 春の葉の茂きが如く (万2・210)

…ももえ槻の木 虚チ期チに 枝させる如 (万2・213)

…暖河の国と 己チ其チの 国のみ中ゆ 出で立てる富士の高嶺は (万3・319)

…許チ期チの 花の盛りに (万9・1749)

…許チ碁チの 山のかひに (記91)

(ホ) コトゴト (事事) 紀5, 万5・797, 892, 894, 万17・400。

…わが率ねし 妹は忘らじ 世の抛ト駈トも (紀5)

…あをによし 國中許ト其ト 見せましものを (万5・797)

…布肩衣 有りの許ト其ト 着そへども (万5・892)

…今の世の 人許ト期ト 目の前に見たり知りたり (万5・8921)

…越の中 國中許ト其ト (万17・4000)

(ヘ) コロゴロ (頃頃) 万4・485

…日の己ロ其ロは 恋ひつつもあらむ (万4・485)

(ト) サキザキ (埼埼) 記5

…うち廻る 島の佐キ邪キ かき廻る磯の埼おちず (記5)

これらの事例は、たとへば「サクラ婆ナ (桜花)」「ヤマ鵝ハ (山川)」が、それぞれ前者によつて後者が修飾 (限定) されてゐる一般の連濁と異つて、たとへば「クニグニ (国)」「クマグマ (隈隈)」は二つの語を並列することによつて「それぞれの国 (すべて・皆)」「それぞれの隈 (すべて・皆)」の意を含むのである。言ひかへれば「すべての国」「すべての隈」とでも総称する時に、(あるいは多数を意味する時に) 二語を並列してあげることによつて、すべて (もしくは多数) を指示する機能を持つのである。したがつて単に「クニとクニ (国と国)」「クマとクマ (隈と隈)」の意ではないので、二語による総称 (多数指示) の機能を果たすために連濁したと考へられるのである。

ここで注目すべきは「クニグニ (国国)」の連濁事例の存在であらう。前節で見たやうに「クニ」の連接事例は多数といへる程上代に存在するが、そのいづれもが不連濁の事例であつた。「修飾 (限定) 語+クニ (国)」といふ連接の際は連濁を肯へんじない「クニ (国)」が、総称的並列用法の際は、他の、連濁的傾向にある語と同様、「クニグニ (国国)」と連濁形を採るのは、まさしくそこに意味機能・文法機能の差異がある故に、一般の総称的 (多

数指示的) 語の形成法に従つたものであらう。ここでは語としての連濁・不連濁性より、意味上「総称(多数指示)」の機能を果たすために連濁することが優先している。もちろん、上代には総称的語としては「みな(皆)」があり、

人未奈の見らむ松浦の玉島を(万5・862)

かちの音は 大宮人の未奈聞くまでに(万20・4459)

物皆はあらたまるよし(万10・1885)

山川悉動, 国土皆震。(古事記, 神代)

などの用法が見えるが、同語連接の連濁する形の特徴は、同じく同語連接でありながら連濁しない次の事例と比較すれば一層明瞭とならう。

a 出でて行きし 日をかぞへつつ 家布家布(今日今日) と 吾を待たすらむ 父母らほも
(万5・890)

b 宮人の 安眠も寝ずて 家布家布(今日今日) と 待つらむものを見えぬ君かも
(万15・3771)

c …月かさね 憂へさまよひ 許等許等(事事) は 死ななと思へど (万5・897)

d 淡路島 いや二並び 小豆島 いや二並び よろしき辞マ之マ(島島) (紀40)

e とこしへに 君に逢へやも いさな取り 海の浜藻の 寄る等キ等キ(時時) を (紀68)

f 等伎騰吉(時時) の 花は咲けども (万20・4323)

a b の「ケフケフト(今日今日)」は「今日こそ今日こそと」の意でそれぞれの今日に力点がある。また c の事例は「事事(ことごとすべて)」すなはち「ことごとく」の意ではなく「事が事なら(同じことなら)」の意である。d の「よろしき島島」も「よろしき島と島」の並称であつて「すべてよろしき島島」の意ではない。同様に e の「寄る時時」は「寄る時すべて」ではなくて「寄る時寄る時(を)」の意である。

したがつて以上の例は、その表記に従つて不連濁で訓むことは意味の上からも裏づけることができよう。問題は f の事例である。f の「等伎騰吉」は、この表記に従つてトキトキと訓まれることが圧倒的である。しかし、この歌の意味は「その時節その時節の花は咲くけれど」の意であつて「それぞれの時節すべて」の意とはやや異なる。ここは「トキトキ(時時)」と訓むところではないだらうか。この歌の表記は

等伎騰吉の はなはさけ登も、なにすれそはは 登ふはなのさきでこずけむ

とあつて「登」をトドに両用する如く、いささかトドに関する表記に精密を欠く。また、この歌の属する遠江国防人歌7首中「騰」はこの一例のみであつて清濁いづれにあてたか、その限りでは分明でない。遠江国防人歌7首のト音節表記は「等」字であつて、「騰」はこの

歌のみにしか見えない。よつて思ふにこの「騰吉」は「トキ」であつて、冒頭の「等伎」に対する変字ではないだらうか。少なくともトキトキと清音に訓んで不都合はなささうである。

以上の例によつても明らかなやうに、形態としては同じ同語連接であつても、意味によつて連濁・不連濁の区別が、（それが連濁語・不連濁語であるを問はず）明確に存してゐたと思はれる。したがつて、以下の訓仮名表記の場合も上例の傾向に準じ意味によつて訓みわけられるべきであらう。

a 秋時花 種=有等（秋の花くさぐさにあれど）万19・4255

b 寺寺の 女餓鬼申さく…万16・3840

c うち川の 瀬瀬のしき波 しくしくに…万11・2427（他に4例）

aの歌は異訓があるが「種（クサグサ）」の訓みをとる限り、多くの種類を意味するのであるから連濁して訓むところだらう。「寺寺（テラデラ）」「瀬瀬（セゼ）」も従来の訓にある如く連濁して訓むべきだらう。ただし、次の例はいかがであらうか。

d …うつそみと思ひし時 春べは花折りかざし秋立てば もみち葉かざし

しきたへの袖たづさはり 鏡なす見れども飽かず 望月のいやめづらしみ

思ほしし 君と時時 いでまして遊び給ひし みけ向ふ 城の上の宮を…（万2・196）

上例の「時時」は「背の君と時々おでましになつて」（古典大系万葉集）の口語訳が示すやうに「時折・をりにふれて」の意に採るのが一般である。その訓みも「等伎騰吉」（万20・4323）の例に従ひ（万葉集注釈一沢瀧久孝）トキトキと連濁して訓む。しかし、この「時時」は漠然と過去のある時を指したり、時折の意味であるより、上掲の歌に即して考へれば「春べは」「秋立てば」の句がある如く、それに呼応してその時節時節に、と解する方がよりふさはしく思はれる。もちろん「注釈」が引用依拠した「等伎騰吉の花は咲けども」（万20・4323）の「時時」の意も「その時節時節」の意味であり、訓みも先述した如くトキトキと訓んで不都合ではなかつた。この人麻呂作歌も「背の君と共に、（袖つらねて）その時節時節に幸でまして遊び給」うた事実があり、「春べは」「秋たてば」と具体的に歌つたに相違ない。とすれば少なくとも一考の余地のあるところと思はれる。

[4]

上代の連濁現象の中には、「修飾語+被修飾語」の関係にあるものの外に、同語連接の際連濁することによつて新たな意義を獲得する場合もあることが明らかとなつた。とくに、前者の関係において不連濁である語が、後者の場合には連濁するといふ特殊な現象は、連濁現象が、上代において、単なる有声化の音韻現象でもなく、また上代以前の祖形をそのまま保

存反映してゐるわけのものでも無いことを暗示する。上記の傾向をもつ不連濁語の存在は、上代の連濁現象のさまざまな条件の一つの徴表的意義を持つものと言へるだらう。

(41・9・12稿)

ABOUT NON-RENDAKU WORDS IN NARA PERIOD

Takashi Moriyama

So far we have had two or three different ways of interpretation of the rendaku-phenomenon in Old Japanese, e.g. yama-gafa < yama-kafa.

1) The theory that it was brought into being by the vocalization due to phonetic context.

2) The theory that its vocalization was caused by the intervening word as nö or ni contracted and then elided, e.g. yama-gafa < yama-n-kafa < yama-nö-kafa.

3) The theory that it was the trace of voiced cconso-

nants which had been capable of coming initial in words before Nara Period.

Every one of these theories does not seem qualified to be the irrefutable interpretation of the rendaku-phenomenon, but only a suggestion that it may be so. Taking all in all rendaku occurrences, we have discovered the following facts:

a) Some words always cause rendaku in their compounds.

b) Some words cause no rendaku in their compounds, e.g. ki, kuni, shiwo, shima.

Some words which belong to the b group cause rendaku in the reduplication of the same word, meaning 'many kuni (countries)', not 'one kuni and another.' Hence the conclusion that the rendaku-phenomenon in Nara Period was not only phonological but more or less semantic.